

侘び寂び男子

令和元年度九月

清淨庵

平成三十年九月～令和元年九月

活動報告

平成三十年 九月七日

文化祭にて、清風オリジナル和菓子

八日

「翡翠の雫」販売

十月二二日

オープニングスクール 茶道体験

二八日

月釜

十一月十一日

お茶室清掃

十三日

お茶室でのお稽古開始

三一年 一月六日

お初釜

三月二一日

お茶室披き

四月一四日

大茶盛

令和元年 七月一五日

作陶

七月二九日

家元見学

九月六日

文化祭

英信翁

清淨庵



清風茶道部の
活動報告です。
これを見て、皆さんが
茶道に興味を
持たれるとうれしいです！

茶道部について

黒澤春陽

茶道部は週一回、二時間程の活動を行っています。昨年までは近くのマンションでお稽古をしていましたが、昨年末から新しくできたお茶室でお稽古をしています。教室をそのまま使ってお茶室を作ったので、とても広く感じます。また、部員の数は二十二人になり、前のマンションではあまりに狭かつたので良かつたです。そのお茶室には、「清淨庵」という名前がつけられました。これは、煩惱、私欲などがなく、心身が清らかという意味が込められています。表千家家元の「松風樓」と内室のサイズが等しく、風情があります。これからもますますお稽古を頑張つていこうと思います。清風生で興味があると思った人は、一度体験に来てください。待っています。

文化祭までの軌跡

赤坂奎茉

私は去年入部したので、私にとつて昨年の文化祭は初めての経験であり、上手くお茶を点てることができ

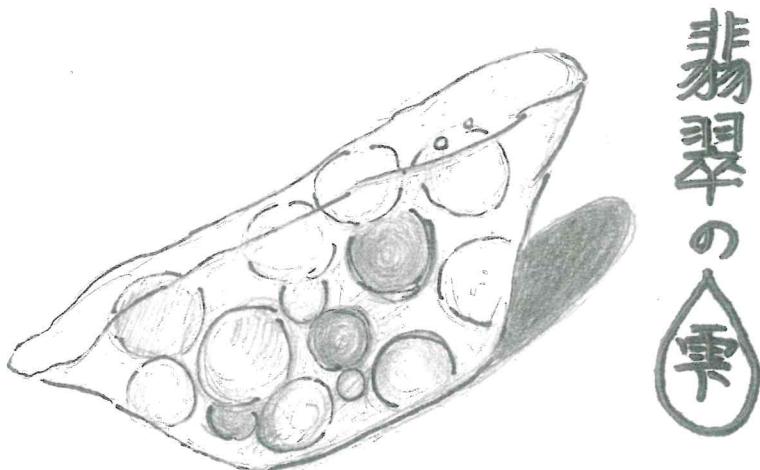
るのか、粗相無くお菓子やお茶を提供できるのか、など心配でした。私は左利きなので慣れるのにとても時間がかかりましたが、小西先生や先輩をはじめ、部員全員が優しく教えてくれました。少しでもミスをなくすために文化祭まで練習を重ねていきました。

文化祭初日では先輩方や同級生に色々なことを教えてもらひながら、なんとか乗り切ることが出来ました。慣れないことだらけでみんなに迷惑をかけたと思います。

二日目では初日の反省を活かし、スムーズに動くことができました。

二日目では裏でお茶を三百杯ほど点て続けました。慣れない右手で素早く丁寧に点てないといけなかつたので最初はとても辛かつたですが、この一日で非常に進歩することができました。

去年は部員が赤膚焼の銘々皿とお茶碗を手作りし、^ミ翡翠の雫^ミは清風オリジナルのお菓子でした。天気がすぐれない中八百五十個のお菓子を売り切れてとても嬉しかったです。今年も去年の文化祭に負けないほど誠心誠意努めていきます。



説明会時の部活動紹介

黒澤春陽

絵を書いてくださったことです。

(下がその時の写真です)

僕は、中学三年生向けの説明会の後の部活動紹介に参加しました。しかしこれは、茶道部でも初めてだということで、困難を極めました。具体的には、普段、茶道は正座でしますが、お茶室ではなく教室ですの机と椅子を使っておもてなしすることや、教室に水道がない為、お茶碗を洗うのが大変なこと、湯沸し器のコンセントやボタンの問題もありました。しかし、早めに集合して

いた為、話し合うことや、事前練習が出来たので、まずまず良く成ったと思います。当日、作法を教えて下さる顧問が不在だったので、少し作法的な疑問が残ってしまいました。悪い点ばかり書いてしまいましたが、良い事もありました。中田先生という、書画の先生が、黒板に竹の



月釜

大路仁博

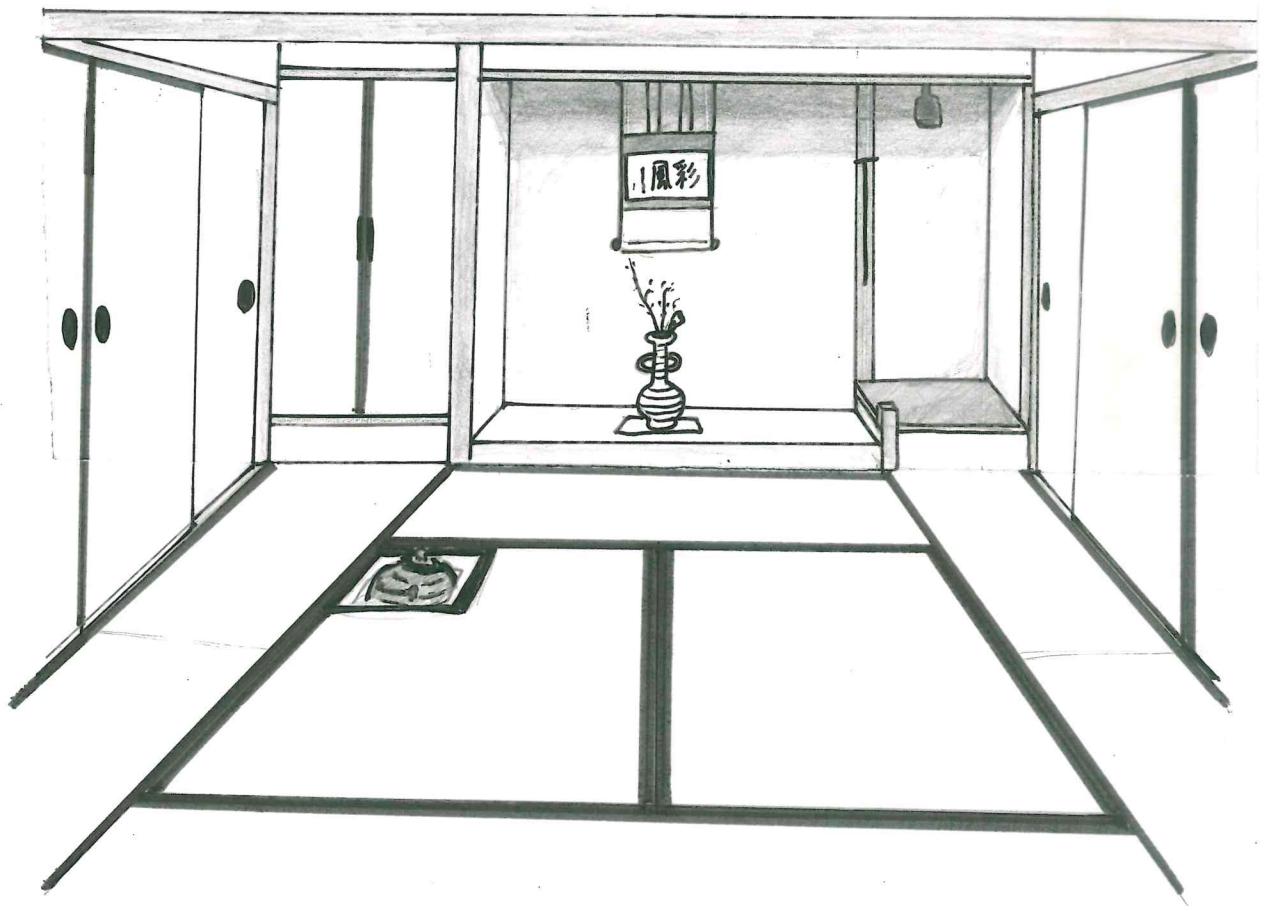
昨年十月二十八日に大徳寺端峯院で催された月釜というお茶会にご招待いただき参加しました。私は、お茶会とは侘び寂びの精神を重んじ、静かにお茶を楽しむものだと思っていましたが、お茶会のお客人の方々が和やかに談笑される様子を見て想像よりは気軽に臨めるもののだと思い、緊張が少しほぐれました。お茶を習っていたからこそ出来たこのような貴重な体験でした。

また、今年三月には清風茶道部のお茶室披露があり、今回の月釜がとても参考になりました。

お茶室でのお稽古

塙本遼平

私がお茶室で初めてお稽古をした際、その内装に驚きました。広くて明るい床の間、青い毛氈の上に乗っている立札机などの配置、床の間を引き立てる生け花と掛け軸などがあり、まるで由緒あるお茶室に来たかのようだったからです。そのような場所でお稽古が出来るのが嬉しくて、より一層お稽古に精進しようとしました。また、お茶室が新しく出来て、お稽古に新しく使われる道具が見られました。特に、印象深いのは高麗卓です。これまで見ていた棚は丸いものでしたが、これは四角くて珍しかったからです。他に印象深い出来事にお初釜がありました。新年を祝う行事として、一月上旬に行われました。金箔が貼られた大きな茶碗に入った濃茶を回し飲み



初釜

山下 瑞介

新年の最初に行われるお茶会をお初釜と言います。今年のお初釜は一月六日に部員一同及び先生方が集まつて、新装なつた校内のお茶室で行われました。

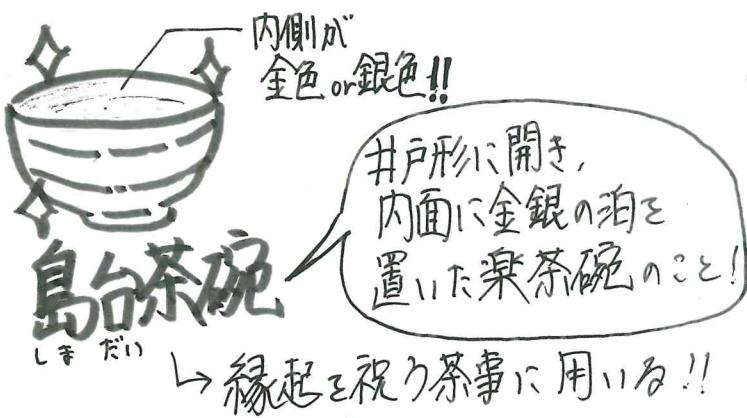
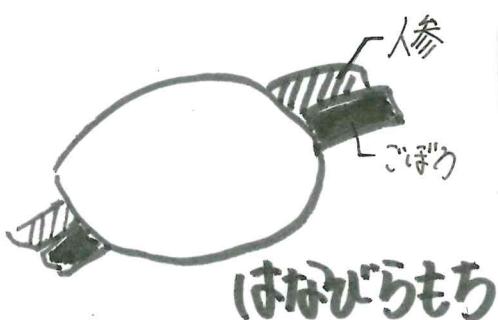
最初に塩漬けされた桜の花びらが浮かぶ桜湯を頂きました。この桜湯は湯呑みの中で花が開くことから、お祝いの席でもてなされます。

続いて、新春の風物詩とも言える花びら餅を頂きました。花びら餅は、甘く煮た牛蒡と白味噌餡を餅で包んだ和菓子です。ボリュームがある上、今までに頂いた和菓子の中で一番美味しかったように思います。その後は日頃ご指導頂いている小西先生が点てられたお濃茶を頂きました。お濃茶は文字通り薄茶よりもお湯に対するお茶(粉末)の量が多く、

ドロツとしているのが特徴で、お茶席にいる人で一つのお茶碗で回し飲みするのが一般的です。口にした瞬間は苦さに驚きますが、あとからじわじわと広がるお濃茶ならではのお茶の風味がなんとも言えません。

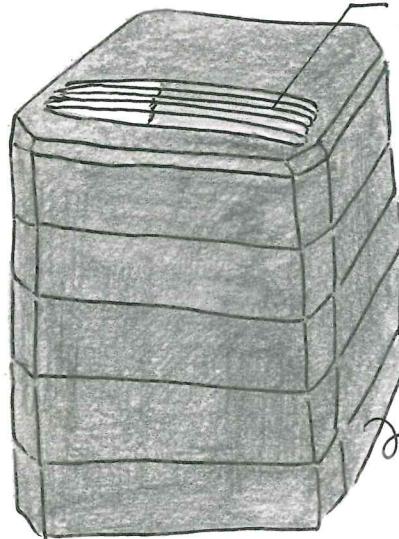
その次に部員各自でお茶を点てたあとは、福引きが行われました。あたりのくじには寿、鶴、亀などといった縁起のいい漢字一文字が書かれていて、お茶碗を当てた部員もいたので、とても盛り上がりました。

今年のお稽古は昨年にも増して精進して参ります。



これでお濃茶といふださます。

★重箱からお菓子を取り出方法



黒文字 [木のお菓子切り]
くろもじ

重箱 [中に はなびらもと]

下かり
といく

①下から2段目より上の段の箱を
両手にもたせ、一番下の箱に
入り、いるお菓子の個数を確認する。

お菓子の個数を
確認!!



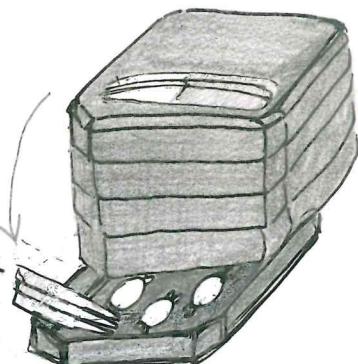
両手で
抱える

③一番下の段以外の箱
を隣に回していく。
(以下同様)



②両手にもたせていた箱を、一番下
の箱と少しづラして状態で置き、
ズラしたすき間にお菓子の個数と
同じ個数だけ黒文字を入れる。

黒文字を
のせる!!



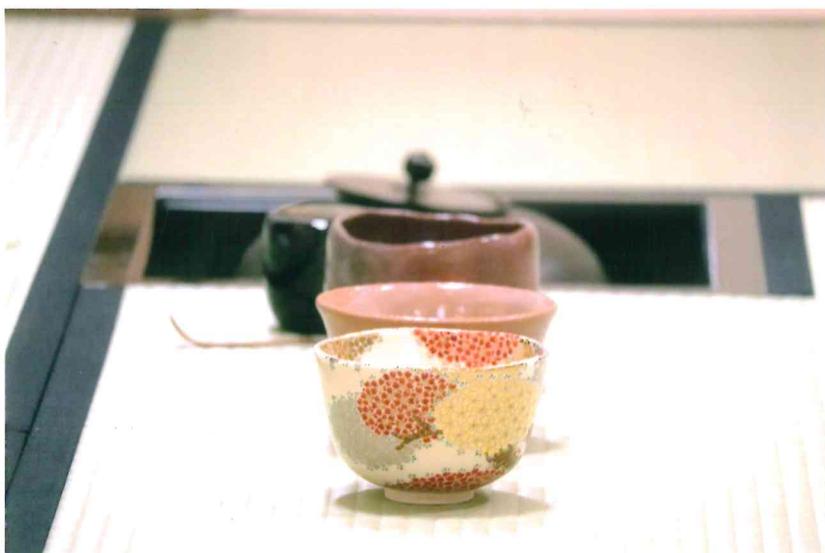
お茶室披き

①本田義法

今回のお茶室披きは理事長先生の卒寿祝いとお茶室のお披露目を兼ねて行われました。お茶室は、清風が出来て以来、初めて建てられたもので表千家の本格的な茶室であり、私はそこで毎週お稽古とご指導を受けています。本格的な茶室ということもあり、お茶室を使い初めて間もない頃は、そこでお稽古が出来るごとに気分が舞い上がるとともに、あまりにも綺麗なため、汚してはいけないということで大変、緊張しました。今回の茶室披きは茶道部が出来て以来初めての事ということもあり、何ヶ月も前から準備が行われ、お稽古も数が増えて次第に厳しくなつていきました。最初はほとんど出来なかつたお手前もお稽古を重ねる度にだんだん覚えられるようになり

ました。またお手前だけでなく、客の接待の仕方もご指導頂き、特にお客様をお呼びするときの作法などは大変難しかつたです。抜かりなく準備を進めたので本番は大丈夫だと思つていましたが、いざ本番、お手前をしてみると緊張してしまい何度も間違いをしてしまい、他の部員達に助けてもらい何とかやり遂げることができました。また、お客様にお茶を提供するときも、お客様に色とりどりのお茶碗を楽しんでもらうためにお茶碗の出す順番も決まっており、お越し頂いた方達が大変偉い方達だったため、お茶を出すときに緊張で少し手が震えました。

しかし途中、色々な事がありながらも周りの部員達や先生の社中さん達のご協力もありお茶室披きを無事に終えることができました。私はこのお茶室披きでお稽古だけでなく、礼



②梶谷亘

お茶席披き、体で作法、頭で気遣い
茶室披きでは高校二年生は最高学
年であつたのでお茶席でのお点前と
いう重要な役割を担つていた。三か
月前くらいにそういうことが決ま
つた時、正直に言つて、私はお点前
の手順たるものあまり覚えていな
かった。しかしそれは、私に限つた
話ではなかつた。先生はそのことを
よく分かつていらして、二年生には
通常の稽古日以外に特別稽古をして
いた。手順といつても、紙に
動きだけをまとめるとA4用紙一枚
に収まつてしまつただろう。これが定
期テストの出題範囲なら、簡単に点
を取れそうだ。しかしお点前では簡
単にはいかない。頭では分かつてい
ても、実際にするとなると話が違
う。私などは利き手の左手が主張し
てくる。左手にはやはり培われてき
たものがあるみたいだ。だが「えー

と、これこれがあーで……」といつ
た具合にいろいろ考えながらする
と、時間がかかるし、スプーンが急
に持てなくなるみたいに何が何だか
分からなくなる。そうなると「体で
覚える」となるし、たいていのスポ
ーツがそうであるように練習に尽き
る。

練習をこなしても本番の緊張感は
解消できるものではない。逃げ出し
たい衝動に駆られそうになつたのも
一度ではない。お点前以外の、お菓
子運びなどの職務でも緊張がゆえ
に、曖昧にしか体に入つていない箇
所ではありえない動きをしていた。

お点前では、先生曰く、好評であつたらし
い。

私にとつてはさんざん恥をかいた
行事であつたが、心のどこかで楽し
んでいた気がする。こういうのを
「やりがい」というのかもしれない
。それと同時に、本番ではない部
分にますますの意義を感じた。これ
からさき、いつかの本番のため、体
に色々なことをしつかりと染みこま
せていくこうと思う。

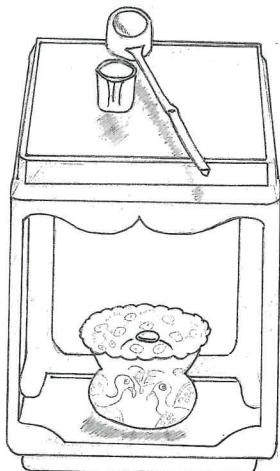
なさよりも足りなさを感じた。稽古
はやはりおろそかにできない。使つ
たのは体ばかりではない。自分が何
をすればいいのか考える気遣いが必
要で頭も一応使う。私がうまく頭を
働かしたかどうかは不明であるが、
部員皆は責任感を持っていたと私は
思う。そのためかお茶室披き 자체
は、先生曰く、好評であつたらし
い。

③池田遙紀

茶道部念願のお茶室が完成し、三月二十一日にお茶室披きが盛大に開催されました。立派なお茶室に負けないよう、小西先生をはじめ諸先生方の熱心なご指導の元、部員一丸となり本番に向けて取り組んできました。そして、心地よい緊張といよいよだという期待を胸に、お茶会がはじまりました。この日のために週2回のお稽古に励んだおかげで、自然に体が動きました。頭で考えるだけでなく、流れるような所作が出来るようにならないといけないと言われてきましたが、少しだけ分かつたような気がしました。

大勢のお客様を招いてのお茶席は、普段の部活では経験出来ないような真のおもてなしの心を学ぶことができただいたのですが、あまりに緊張した

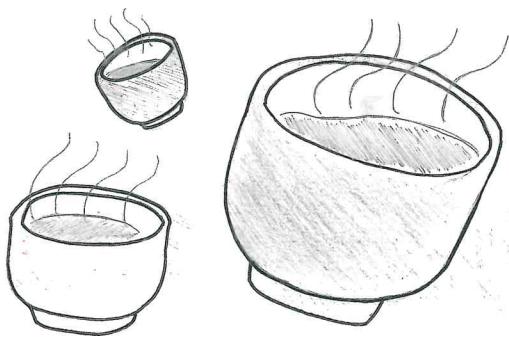
て手が震え、頭が真っ白になり、一瞬、自分が今どの所作をしているのか分からなくなつた時がありました。普段のお稽古であれば先生が教えてくださるのですが、当日は誰に聞くことも出来ず、何とかその場を切り抜けることは出来ましたが、それはかつてない程の緊張でした。お茶会でおもてなしをする側になるというのは滅多にない機会ですので、そういった意味でも、このお茶室披きは私たち茶道部員にとってかけがえのない経験になりました。



④ 塩谷五郎

僕にとって、今回のお茶室披きは初めてのお茶会でした。お茶の世界で有名な方や、様々なお偉いさんがお越しになつており、いざ本番となると緊張しました。

僕は接待をしたり、お茶やお菓子をお客さんにお出しすることになつていました。接待では、はじめのうちには緊張してなかなか声が出なかつたり、上手く案内することができませんでしたが、次第に慣れてゆき、徐々に上手に振る舞うことができたのではないかと思います。また、お菓子やお茶を出す際に、もうできると思つていたことを本番で間違つてしまい、まだまだだと痛感しました。これからも基本を怠ることなく、取り組んでいこうと感じました。



も有名などころで作られているもので、大変素晴らしいものでした。特に、お菓子がとても美味しくて印象に残っています。太宰府から取り寄せたという、お干菓子は、食べたことのない感触で、まだまだ知らないものが沢山あるのだと感じました。今回のこのような機会に巡り合うことができ、大変に嬉しく思います。他の部員の方々と仲良くなるきっかけにもなり、とても良かつたです。この経験をこれからに活かしていきたいと思います。

西大寺の大茶盛

① 塩野泰正

四月十四日、私は茶道部で西大寺の大茶盛に参加させていただきました。西大寺は、奈良県にある聖武天皇の娘に当たる称徳天皇によって建立された、非常に歴史の長い由緒正しいお寺です。そのような背景もあり、初め私は非常に緊張していましたが、この大茶盛は私の予想していたものとは違つたものでした。

大きな広間に通されると、ほどなくしてお坊さんがお出でになり、西大寺の歴史や大茶盛の歴史についてお話をされました。このお坊さんは中々の饒舌で、時折笑いが起きたりして、厳かな雰囲気のいわゆるお茶会とは違っていました。というのには、その昔、この西大寺では法要の際、お茶をお供えていたそうなのですが、当時お茶は薬として扱われ

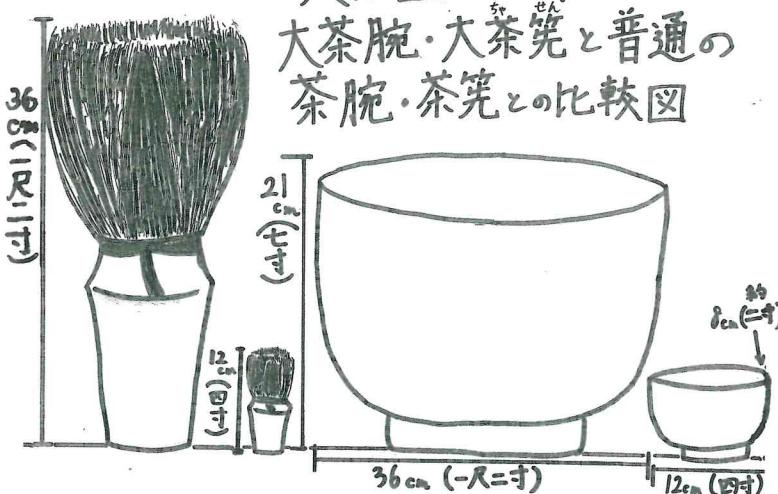
ており、とても庶民が手にするものではありませんでした。そこで、法要の後に一般人にそのお茶が振る舞われたそうです。人々は、大きな鉢にお茶を注いでもらい、それを何人かで分け合つたそうです。大茶盛の茶碗が大きいのはそのためでしょう（私の推測ですが）。また「茶会」ではなく「茶盛」なのは、お酒で宴会できなかつた僧侶が代わりにお茶を使って「酒盛」ではなく「茶盛」をしていましたが由来だそうです。

つまり、この大茶盛は、皆で楽しい時間を過ごすことがコンセプトになつてゐるのです。大きな茶碗を誰かに支えてもらいながら、和氣あいあいと、皆で笑いながらお茶を頂くこそがこの大茶盛の醍醐味なのです。

私はこの大茶盛に参加し、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。雰囲気も和やかで、茶道を

されている方はもちろん、されていない方も楽しめる場になつております。年二回、春と秋に催されているので、皆さんも一度行ってみてはいかがでしょうか。

※大茶盛で使用された
大茶碗・大茶筅と普通の
茶碗・茶筅との比較図



②三田龍之介

僕が茶道部に入つて約半年間が経ち、既に後輩がいる中で初歩から色々な先輩方や先生方からのご指導のもとお稽古に励んできました。

その中で少しづつ成長して少しづつ自信がつき様々な行事にも参加させて頂き茶道部として色々な経験を積んできました。

今回、平成最後の西大寺の大茶盛に参加させていただきその場でのお坊さんの解説などを聞きお茶は深いと思いました。時代と一緒に変化するお茶の文化、一見関係なさそうな仏教にも実は密接な関係があつたりと僕の認識していたお茶のイメージと大きく違つたので驚きました、それと同時に時代の流れと共に形は変えつつ今も国民に愛されているお茶の文化や歴史を知ることができてとても素敵な体験になつたと思います。

今は先輩方が居て僕たちの学年は先

今ではお茶はコンビニでペットボトルに入れられて売られています。安く手に入れることができます。誰でも飲むことができます。しかしながら、昔はお茶はとても高価なもので

輩方に任せていいですが、これから僕たちが先輩方の様に後輩たちに茶道を見せる事になるので引っ張つていける様に努力したいと思います。

③桐井海舟

僕は四月十四日に西大寺で行われた大茶盛に行きました。大茶盛は一三三九年一月一六日に叡尊という方が八幡神社に献茶した余服を民衆の方々に振る舞つたことに由来しています。そこで使われる道具はとても大きく、なかでもお茶碗は直径四十cm 重さが五kg もあり、僕は一人で持つことができなかつたので横の先輩に持つてもらひながらお茶を飲みました。その大きさと重さにとても驚きました。今回頂いたお茶とお菓子はとてもおいしくてまろやかでした。

お茶の世界はとても奥が深く、知らないことがたくさんありました。

今までお茶を飲んでいたことは、お茶を飲むことを「茶盛」といって、お茶を飲むことを「酒盛」といって、お茶を飲むことを「茶盛」になつたそうです。

お茶の世界はとても奥が深く、知らないことがたくさんありました。

これからも僕はお茶のことについて勉強していきたいです。

④長谷川泰星

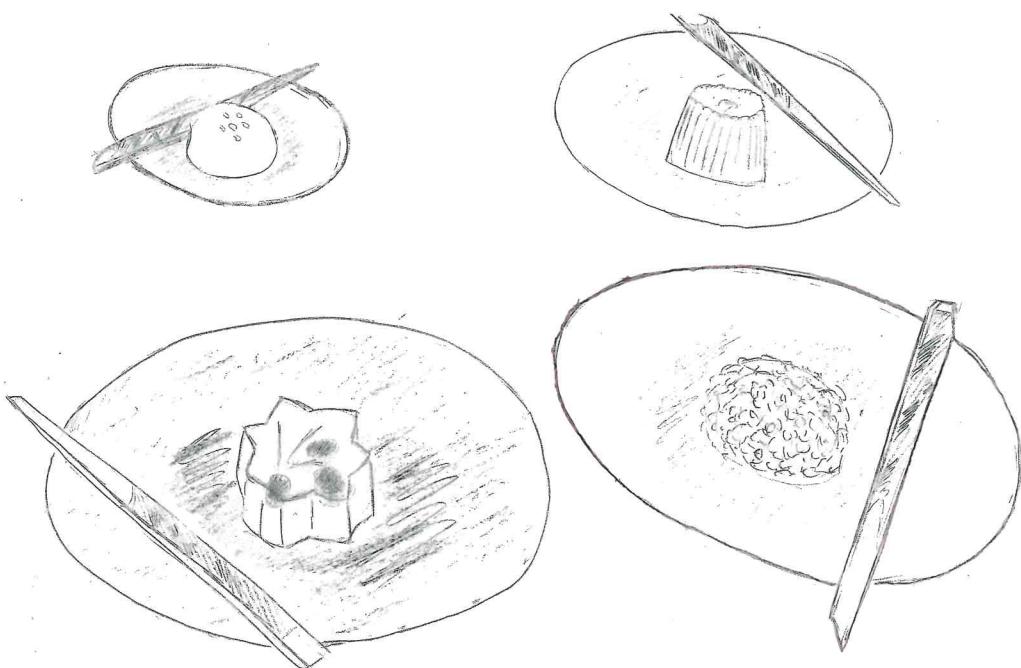
四月十四日に奈良県にある西大寺というお寺で、大茶盛というお茶席がありました。

そこでは、まずお菓子を頂き、その次に大きなお茶碗に入った濃茶という、とても味の濃いお茶を頂きます。この茶碗は大きく、抱きかかえながらお茶をいただき、その中に入っている量も三人から五人分なので、みんなで回し飲みをします。

そしてこの大茶盛。このような名がついた由来は……。觀尊上人という人が神社に献茶した余服を民衆に振る舞つたことで、この伝統行事が生まれました。そして「戒律復興」をめざした觀尊上人が不飲酒戒の実跡として酒盛の代わりに茶盛としたことと、「民衆救済」の一貫とし

て、当時は高価だった薬と認識されていた茶を民衆に施していたが、当時は誰もが茶碗をもっていたわけでもなかつたので、大きな茶碗を使ってみんなで回し飲みをしてお茶を頂いたことが、大茶盛の由来とされています。

この大茶盛を体験して、茶道に関する学び、大人になつてからはしないようなこともできるので、とてもうれしく思います。そして、この体験に参加できなかつた方はぜひ行くとよいでしょう。



作陶

器の広さ・高さをはかるために…



3cm
あちも
あり薄く
しな!!



①手の平で土をたたいて
表面をつぶしていく。

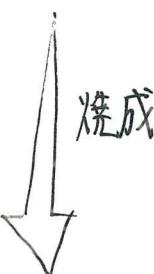


こんな
感じ!!

お茶碗の形
が完成。

②親指で中央の土を
端に寄せて真ん中
に穴を開けていき、
端が高くなるように
していく。

[真ん中の土の厚さが
3cmから約2cmに
なるまで続ける!]



8/1 絵付け



絵をつけていく

- ① 初め 黄、赤、灰色、紺色
↓
② 仕上がり 黄、赤、緑、水色

塗) 初めと
仕方がりて
色が変化!!

家元見学

塚本遼平

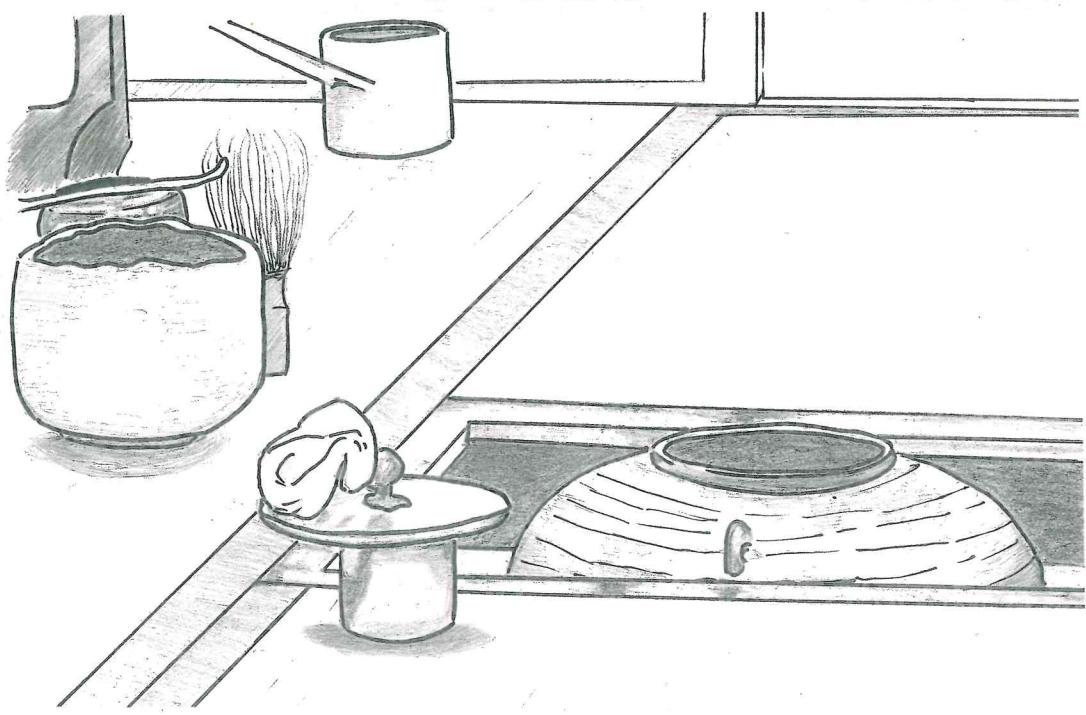
高一で入部し、早二年目に入りました。高二になると、家元見学に行くことになります。私はそれを楽しみに思う反面、不安な気持ちにもなっていました。『自分の腕前で出来るのか、もし失敗すればどうしよう』と。

り、ますます緊張しました。出て来た主菓子は桜色で丸く、光沢のある美しいものでした。それを食べ、お手前を頂戴した後、茶碗を手元に上げて見てしました。その時、すかさず注意され、『やってしまった』と後悔しました。

折角の家元見学で失敗してしまった。帰りの電車の中で今まで疎かにしていた作法の所を直していく、二度とこのような失敗をしないようになると決心しました。私は家元見学で、自分の本当の腕前と練習することの大切さを改めて学ばされました。

そうこうしている間に、家元見学の日がやって来ました。行きしなは友達と話し、気を楽にしていましたが、会場が近くなるほど緊張が湧き上がつて来ました。会場は表千家の不審庵で、紀州藩より拝領したその表門に圧倒されながら、入つて行きました。その後、不審庵の中を見学して、茶会の時間を持つていきました。

そしてついに、茶会の時間が来ました。僕はお正客をすることになりました。



部員二十二名

高校三年

中学二年

良誠悟

打保那樹

長谷川泰星

福井康太郎

中学一年

川口慶人

国際コース

二年

濱田光輝

吉田直輝

一年

乾翔

杉本勇也

四名

桐井
中学三年

高校一年

高校二年

赤坂
大路
佐々木
梶谷
山下

遥紀
奎茉
仁博
常徳
亘
瑠介

(部長)

桐井
中学三年

黒澤
鈴江
三谷

春陽
晟偲
駿

大前
塚本
小林

塩野
佐々木
梶谷
佐々木

泰正
常徳
亘
瑠介

仁博
梶谷
亘
瑠介